

横浜市立大曽根小学校の 特別支援教育 H21.5.20

- 大曽根小学校の特別支援教育の
取り組みと現状
- 大曽根小学校の特別支援教育の
これからと課題

横浜市立大曽根小学校 校長 上田 清次

横浜市立大曽根小学校の紹介

- 昭和40年9月1日 開校 今年45周年目
- 横浜市の北部に位置する
- 東急東横線沿いに位置する
閑静な住宅地
- 一戸建ての住宅が多く
昔の町並みなのでマン
ション等が少ない



教職員の状況

・教員 28人

・教職経験年数別

教職経験年数	0～5年	9人	(32%)
	6～10年	7人	(25%)
	11～15年	3人	(11%)
	16～20年	5人	(18%)
	21年以上	4人	(14%)

教職経験年数が少ない教員が多い。

児童数の状況

- 全校児童数 734人
(男子 385人 女子734人)
- 学級数 1年～3年 各4学級
4年～6年 各3学級
合計21学級
- 個別支援学級 3学級 (12人)

横浜市の小学校 346校の中では中規模校

- 児童数は、今後増加の傾向

特別に配慮を要する児童

- ・特別支援教育総合センターの教育相談の結果、特別に配慮を要すると診断された児童数

(H21年4月現在)

1年 8人 2年 7人 3年 3人

4年 5人 5年 3人 6年 6人

合計 32人

(男子17人 女子15人)

- ・学校が「教育相談」を保護者に勧めたい児童

約15人ほどいる

配慮を要する児童の行動上の特性

- ・アスペルガーの傾向 8人
- ・ADHDの傾向 2人
- ・自閉症の傾向 3人
- ・言語、聴力 5人
- ・傾向が特定できない 14人

(個別支援学級児童は含まれていない)

◎上記児童のうち

情緒障害通級指導教室に通っている児童	6人
難聴・言語障害通級指導教室に通っている児童	5人
個別支援計画を作成して支援している児童	3人

平成17年度、18年度の状況

平成17、18年度の指導体制

◇学級担任と専科(音楽、家庭科、書写)

◇児童の様子

- 全体に落ち着きがない。
- 全校朝会や集会では、おしゃべりが多い。
- 専科の時間に児童同士のトラブルが多い。
- 専科担当と児童がもめることが多い。

平成19年度の取り組みに向けて

- ・平成18年度の反省から
- ・課題が多い

人的余裕がない

時間の余裕がない

教室の余裕がない

教師の課題

- ・毎時間、毎時間、特別な教育的支援を必要とする児童の支援をする先生を計画的に配置することが可能なのか。
- ・可能だとしても、その計画を誰が、毎週たてるのか。
- ・実施の確認を誰が、いつするのか。
- ・そして、年間を通して継続が可能なのか。

児童に対する課題

- ・毎回、毎回、違う先生に支援されるのは、本当は児童の負担になるのではないか。
- ・一人ひとりの児童に必要な支援をするための児童理解が、可能なのか。
- ・まず、児童が支援をしてくれる先生を信頼するところから「特別支援教育」は、始まるのではないだろうか。

全員の児童に特別支援教育を

- ・ADHD、高機能自閉症、アスペルガーと診断されている児童だけが、支援が必要なのだろうか。
- ・「リーダーになったけれどうまくまとめられない」、「何となく不安」と思っている児童等にも教育的支援が必要なのではないのか。
- ・全員の児童が安心して学習、生活できる支援は、できないのだろうか。

結論から発展へ

- ・現在の組織、考え方では無理。
- ・なんとかできないだろうか。

- ・コンパクトで動きやすく、そして、長続きする支援体制。
- ・一人ひとりの児童に支援の効果が期待できる支援体制。
- ・先生が支援しやすい時間の設定。

新しい校内支援体制をつくろう

- まず、今までの専科の廃止。
- かわりに「サポートティーチャー(ST)」の配置。
 - 5、6年は、各学年に1人配置。
 - 3、4年に1人配置。
 - 1、2年、個別支援学級に1人配置。
- 校内の特別支援教育の組織の見直し。
- 全教職員で全児童に支援を。

サポートティーチャー(ST)とは

- ・各学年に所属し、担任と同じ立場で児童の学習、生活の指導・支援を行う。
- ・各学年の学年研究会(打ち合わせ)に参加する。
- ・学年行事(校外学習、遠足、社会科見学、宿泊体験学習等)に参加、支援をする。
- ・当該学年の給食指導、清掃指導も行う。

STの指導時間について

- ・学級担任は、週24~27時間の指導時間
- ・STは、21~24時間の指導時間
- ・STの指導教科
各学年ごとに決める。ただし、道徳、特活、総合的な学習の指導は、学級担任が行う。
- ・5、6年・・・各学級3時間(T1) 5時間(T2)
- 3、4年・・・各学級2時間(T1) 2時間(T2)
- 1、2年、個別学級・・・各学級2時間(T2)

STの指導教科

- ・3~6年のSTの指導教科(平成21年度)
 - 3年・・・音楽、書写(T1) 算数、図工(T2)
 - 4年・・・音楽、書写(T1) 算数(T2)
 - 5年・・・音楽、家庭科(T1) 算数(T2)
 - 6年・・・音楽、家庭科(T1) 算数(T2)
- 6年は、教科担任制を一部取り入れている

STの活動

- ・4、5月は、所属学年をはなれ1年生の各学級の給食、清掃の補助を行う。
- ・当該学年の担任不在時には、T1として教科指導を行う。
- ・予め保護者の承諾を得ている児童の取り出し指導を行う。
- ・新1年生の学級編成を行う。
- ・校内の特別支援教育推進委員会に所属し、コーディネーターと協力して研究を推進する。

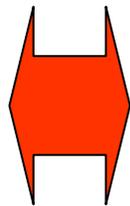
特別支援教育の校内組織

特別支援教育推進委員会

コーディネーター
推進委員会のリーダーとして関係諸機関との連絡調整を行う。

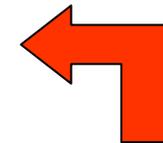
サポートティーチャー

個別支援学級担任



特別支援教育校内委員会 (教職員全員)

- ・研修
- ・児童理解報告会
- ・事例検討会(低・中・高)
- ・副学籍児童との交流
- ・個別の支援シートの作成



学年研究会

- ・日常の具体的な支援
- ・特別に配慮を要する児童についての情報交換

特別支援教育コーディネーターの役割

- ◇特別支援教育推進委員会のリーダー
特別支援教育校内委員会の研修の計画、
立案、講師との連絡調整等
- ◇特別な配慮を要する児童についての情報
収集、管理
コーディネーター 3名(低中高別に)

特別支援教育校内委員会

- 研修

発達障害をはじめ、配慮を要する児童の理解を深めるために研修会を行っている。

講師

- 横浜市教育委員会 特別支援教育課指導主事
 - 特別支援教育総合センター 指導主事
 - 横浜国立大学 教育人間科学部 教授
- 年間 3~4回程度実施している。

- ・児童理解報告会
- ・事例検討会

- ・児童理解報告会

校内の配慮を要する児童の現状、実態を把握し、理解し、支援に関しての共通理解をするために行う。

- ・事例研究会

児童の実態を細かく把握し、支援方法の検討を行う。

(低中高学年ブロックごとに実施)

校長、副校長、養護教諭、個別支援学級担任

サポートティーチャー、当該学年担任、栄養職員

※通級指導教室担任にも、参加していただき支援のヒントをいただく。

年間 8回程度実施している。

事例検討会で出された支援の例

- ・見通しをもたせるために、視覚的に分かるように、授業の流れを提示する。
- ・整理された教室環境
- ・復習・補習プリントの作成
- ・指示は、短く、一度に一つ。
- ・「~します」と具体的に分かる指示を出す。
- ・話しの交通整理をする。

整理された教室環境

- 黒板の上方には掲示物をはらない。
- 時間表や予定表を黒板に書かない。
- 必要な事柄は、小黒板に書き、必要な時に掲示する。
(大曽根スタンダード)



学校行事(入学式、卒業式)の場合も

- ・入学式の練習・・・前日に教室や式場で練習
- ・1年生の教室・・・前の黒板は飾らない。

入学式当日の手順表をはる

- ・校長の話・・・短く、視覚的に(紙芝居方式)
- ・卒業式の校長の式辞・・・視覚的に
具体的に

卒業式式辞の例

大曾根小学校のソーラン節



卒業式式辞の例

20世紀の予言

- 1901年(明治34年) 20世紀最初の日
- 新聞記事・・・「20世紀の予言」
- これからの百年間にどんなことが起こるか。
- どんなことができるようになるのか。

みんなが安心できる学級経営

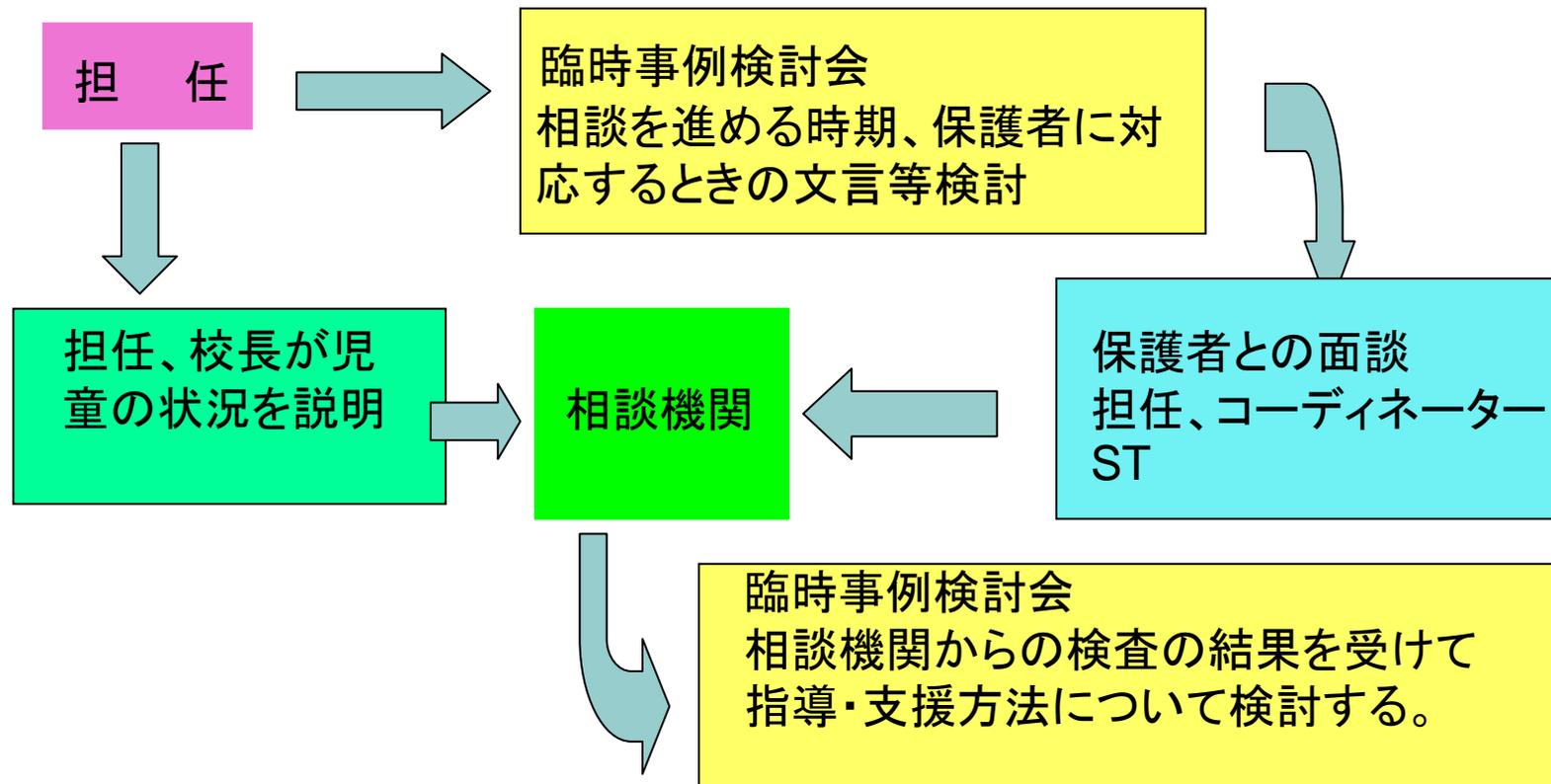
- 違いを認め合える集団。
- 先生はどの子どもも大好きで、大切に思っていることを伝え続ける。
- みんなが安心してすごすためのルールがある。
- 学級の誰に対しても「公平」、そして、「誰もが助けてもらえる」

「苦戦している子への支援」は「全ての子への支援」

特別支援教育推進のポイント

- 組織で対応する
- 特別支援教育コーディネーターの複数制
- 教育的判断をする・・・診断をするのではなく
- ニーズに応じて必要な支援をする
- 二次障害の予防
 早期発見、早期の理解と支援
- 保護者との対応は、あせらず、組織的に

保護者への特別支援教育総合センター等の相談機関への話のすすめ方



大曾根小学校の特別支援教育の これからと課題(1)

- 児童一人ひとりへの支援について
次年度へどのように引き継いでいくか
中学校に個々の児童の支援をどのように
伝えていくか
- 特別支援教室の活用、教室整備について
- STのより効果的な支援・指導の在り方
- 副学籍児童の交流の充実

大曾根小学校の特別支援教育の これからと課題(2)

- 就学児童の情報の収集について
幼稚園や保育園及び保健福祉センター等外部
機関との連携の取り方
- 小中一貫教育に向けての連携の取り方
個別支援計画の一貫性について
- 特徴があるが、目立たない児童の把握及び保護
者
へのはたらきかけ

大曾根小学校の特別支援教育の これからと課題(3)

- ・校内の「特別支援教育」、「人権教育」、「児童指導」の進め方
「大曾根スタンダード」の作成
「Y-Pアセスメント」の理解と活用
- ・特別支援教育、人権教育、児童指導の連携を図るための組織の見直し

大曾根小スタンダードの作成 Y-Pアセスメントシートの活用

- ・「大曾根スタンダード」・・・1年から6年まで同じ規準（スタンダード）で指導を行うために作成し、変化に弱い児童も安心して行動できるようにする。
- ・Y-Pアセスメントシート活用・・・子どもの社会的スキルの育成状況についてのアセスメントを行い、学級や個人の課題を把握して児童指導の改善・工夫にやくだてる。

最後に……

いつも職員に話していること

- 特別支援教育は、特別な児童のための支援ではなく、全児童のための支援です。
 - 担任一人が悩むのではなく、全員教職員で支援をする。これが特別支援教育です。
 - 「できない理由をさがしてやめる」のではなく「今できることをさがし、はじめる」。
- 全ての教育活動の原動力です。

最後に・・・校長の悩みとは

- ・特別支援教育について、校長の悩みに迅速に対応し、支えてくれる組織的な対応がほしい。校長は、考えていないのではなく、考えています。しかし、その考えに自信がないのです。今こそ

一校一校に対応した学校個別支援をしてください